

のためにその都度論じられたに過ぎない。ビザンツでは制度としての教育機関が不十分で、聖職者養成の神学校も不完全であった。ビザンツは教父で錯っているという感じだが、そこに批判精神は宿っていない。却って一つのナショナリズムになっている。

以上の素描でもわかる通り、著者ははっきりと西方の視点に立ってビザンツを論じている。その限りビザンツの神学・哲学の方法論上の性格は極めて明晰に抉り出されている。一言で言えば、それは体系的視点の欠如である。ではそのことによってビザンツ一千年の遺産はすべて空しいものとなるのだろうか。西方的知探究の態度を是とする立場からはそうかもしれない。しかし今問われるべきは、著者も言う、神学と靈性の曖昧な区別に検討を加えつつ、ビザンツにおいて果たした「靈性」の役割を再度、歴史的、文献的、方法的に問い直すことであるように思える。

F. X. Martin and J. A. Richmond (eds.):

*From Augustine to Eriugena. Essays on Neoplatonism
and Christianity in Honor of John O'Meara,*

Washington, 1991, pp. xx+190.

R・L・シロニス

本書は中世思想の専門家たちの論文を集めたものであり、アウグスティヌスとエリウゲナの思想の研究に多大の貢献をなしたアイルランド人の学者オ・マラ教授に献呈されたものである。その論文の大部分は、アウグスティヌスとエリウゲナの思想を取り扱う（七つの論文と五つの論文）。三つの論文が、アウグスティヌスとエリウゲナの思想の背景を成している新プラトン主義をめぐる問題を吟味する。そしてソルボンヌのJ・ペパン（Pépin）の論文は、中世の宗教的な絵画や彫刻における象徴的表現という美術上の問題を取り扱う。この書評では初めに新プラトン主義に関する論文を紹介し、次にアウグスティヌスとエリウゲナに関する論文の内容をまとめ、その中心的な考えを紹介することにする。

A・H・アームストロング（Armstrong）は、三世紀から六世紀までの宗教的・新プラトン主義的思想に見られる否定神学と肯定神学の緊張について論じる。彼によると、キリスト教と無関係な新プラトン主義においては、肯定神学よりも否定神学の方

が強調されている。ポルフェリオス、プロクロス、ダマスキオスが徹底的な否定神学を提唱する。しかしキリスト教的思想においては、新プラトン主義的色彩があるとしても、肯定神学の強調への転換が見られる。それは教父たちが司牧上の理由と論争上の理由から、異教に対してどうしてもキリスト教の特異性を示さなければならなかったからである。否定神学は、キリスト教的思想において、肯定神学と超越的神の体験に基づいたものである。このことはとくにアウグスティヌスにおいて現れる。エリウゲナは、アームストロングによると、偽ディオニュシオスから受け継いだ徹底的否定神学を強調すると同時に、論理学の重要性をも強調し、自分の作品において思弁的考察を目立たせる。

アウグスティヌスの思想について書かれた論文のうちで、マンハッタンヴィル・カレッジ (Manhattanville College) の M・T・クラーク (Clark) のそれは、キリスト教がギリシア化したと主張する現代のある学者たちに反して、アウグスティヌスが純粋なキリスト教思想家であると主張する。アウグスティヌスは、クラークによると、新プラトン主義よりもマリウス・ヴィクトリヌス (Marius Victorinus) の方からより大きな影響を受けた。アウグスティヌスは、プロティノスとは異なり、神を「存在」(esse) という名で呼ぶ。さらにアウグスティヌスは、神の愛を強調し、その愛によって三位一体を理解しようとする。彼は人間論においても、ギリシアの新プラトン主義とは異なる点を有している。たとえば彼は人間を三位一体の似姿として考え、また人間の体がではなく、パウロの手紙に出てくる、神の霊と対立する「肉」こそが、霊による生き方とは相いれないと考える。メイフース (Mayhooth) のセント・パトリック・カレッジ (St. Patrik's College) の T・フィナン (Finan) の論文は、アウグスティヌスが純粋なキリスト教思想家であるというクラークの基本的な考えと一致している。フィナンによると、アウグスティヌスが『告白』の第7巻第10章で述べる神体験は、純粋な神秘的体験である。またアウグスティヌスにおいて、語り尽くしえない存在 (esse) である超越的な神は、アブラハム、イサク、ヤコブの神のように、人間のための内在的な神でもある。しかし被造物と神との間の絶対的な差は、その内在性をはるかに越える。アウグスティヌスにおける神の超越性の意識は、ギリシアのプラトン主義と新プラトン主義から来ただけでなく、聖書からも来たと言える。しかしアウグスティヌスにおいてその意識には、キリストが絶対者である超越神と人間との仲介者 (Mediator) であるという発見が伴う。これは新プラトン主義の中でではなく、聖

書の中でのみ見いだされたものである。

フォードム (Fordham) 大学の R・J・オ・CONNELL (O'Connell) は、アウグスティヌスの初期の作品に出てくるポルフェリオスの新プラトン主義の影響について述べる。その影響はとくに、「無」に関する考えと存在の諸段階に関する考えのうちに現れる。しかし『靈魂の不滅について』へのポルフェリオスの影響があるにしても、アウグスティヌスは結局その作品の中でキリスト教信仰における神の創造の教えを述べているということをも、オ・CONNELL は指摘する。

ランカスター (Lancaster) 大学の G・J・P・オ・DALY (O'Daly) は、「アウグスティヌスの思想における位階 (hierarchies)」というテーマ、すなわちアウグスティヌスの著作に出てくる存在の諸段階 (たとえば存在・善・美, 神・人間・物質界) と下降・上昇という新プラトン主義の中心テーマを取り扱う。とくに『靈魂の偉大さ』という作品に出てくる靈魂の七つの段階を考察する。サラマンカ大学の J・オロズ (Orozu) は、アウグスティヌスがペラギウスとの論争の際に展開した、神が人間を改心へと引きつける (tra here, attra here) という神学上の命題について考察する。彼によると、アウグスティヌスの考えでは神の恵みによって、神への人間の抵抗 (unwillingness) はこころよさ (willingness) に変わり、人間は自発的に信じるようになる。ケンブリッジ大学の H・チャドウィック (Chadwick) は『告白』の第 8 巻第 12 章に出てくる改心のエピソードに関して、アウグスティヌスの著作の諸箇所の文体と照らし合わせて、そのエピソードの歴史的な点と象徴的な点とを識別しようとする。

“Etudes augustinienes” という雑誌の編集委員である G・マデク (Madec) は、アウグスティヌスとエリウゲナにおける「神学」(theologia) という用語の使い方と意味を考察し、両者にとって神学とは知識 (scientia) と知恵 (sapientia) を意味すると結論する。

エリウゲナ思想を取り扱う論文の中では、ミュンヘン大学の W・バイエルワルテス (Beierwaltes) の論文がとくに興味深い。彼はエリウゲナ思想が自分にとって魅力的である理由をあげ、その思想の現代的意義を示す。初めに、過去の著者の作品と思想を理解するための解釈学原理を打ち出す。その原理は、現代の読者が過去の著者の歴史的・文化的背景と自分のそれとのへだたりを考慮に入れながら、過去のそれに関心を持って直面しなければならないということである。そうすることによ

って初めて、主観的な解釈と、偏見による誤解を避けることができるであろう。バイエルヴァルテスによると、オ・マラは、エリウゲナの学問的活動をその直接的・歴史的状况の中に位置づけ、その思想をその源泉（とくにアウグスティヌス）との関連において考察した。エリウゲナが独自の考えと他者の考えを総合するすぐれた才能を有しており、その総合に基づいて、九世紀には珍しい思弁的な哲学と神学をうちたてたことを、オ・マラは見抜いていた。彼はそこから、エリウゲナの思想を魅力的なものとして示し得たのである。

バイエルヴァルテスは続いて、エリウゲナの思想の中で彼自身にとってとくに魅力のある点をいくつか述べる。その一つは、エリウゲナが極端な合理主義と極端な非理性的態度とを避け、神学（聖書）と哲学を調和させながら自分の思想体系を樹立したということである。そのことによってエリウゲナは、後に思想体系を作った思想家の先駆者であり、上述の極端に陥る思想家が多い現代において、魅力ある思想家となったのである。

バイエルヴァルテスにとってとくに魅力的なのは、エリウゲナの思想とヘーゲルの思想との間に類似点があるということである。それはエリウゲナにおいて、論理学が学問的論証の道具であるばかりでなく、存在論的性格を有しているものであるということである。つまり神の内的働きと、世界における神現としてのその外化・無化（Entäußerung）及び神からの万物の発出と、神へのその還帰というプロセスは、それ自体として弁証法的である（ist selbst dialektisch）。そのために、そのプロセスは論理的・弁証法的に記述される。しかしバイエルヴァルテスはその類似点と同時に、エリウゲナにおいてはそのプロセスの始まりが充実したもの（Fülle）として考えられているのに対して、ヘーゲルにおいては抽象的で空虚な出発点（abstrakt-leerer Anfang）が考えられているという非類似点もあげている。バイエルヴァルテスはエリウゲナの思想とヘーゲルの観念論とのもう一つの接点として、神と人間における自己意識ないし自覚（Selbstbewusstsein）を基礎づける努力をあげている。しかしその接点は問題提起において見られるのであって、その問題の回答において見られるものではない。筆者の意見では、その連続性は、アウグスティヌスなどのキリスト教的新プラトン主義の中に見いだされる精神についての考えを観念論が受け継いだことによって説明できる。さらに、エリウゲナの否定神学は、バイエルヴァルテスが指摘する非類似点に付加されるべきもう一つの非類似点である。

エリウゲナの思想に関するヨーク (York) 大学の M・ヘレン (Herren) とパリの国立科学研究所の E・ジョノー (Jeauneau) の論文は、それぞれエリウゲナの詩的作品の源泉と形態及びヨハネ福音書の序文に関するエリウゲナの説教の後代の解説集と引用を考察している。

G. L. Bursill-Hall, Sten Ebbesen
and E. F. Konrad Koerner (eds.):
*De ortu grammaticae. Studies in medieval grammar
and linguistic theory in memory of Jan Pinborg.*
Amsterdam, 1990, pp.x+372.

加藤 雅人

本書は、その題名にもあるとおり、中世の言語論・論理学研究の第一人者でありながら1982年に享年45歳の若さで亡くなった Jan Pinborg (1937-1982) への追悼論文集で、いわゆる「アムステルダム言語学研究叢書」の *Studies in the History of the Language Sciences* シリーズの一冊として刊行されている。編集責任を負うのは、同シリーズの監修者 Konrad Koerner (Univ. of Ottawa), 思弁文法学の研究で有名な G. L. Bursill-Hall (Simon Fraser Univ. Vancouver, B. C.), 故人の同僚で共同研究者としても知られる Sten Ebbesen (Univ. of Copenhagen) の3人で、その他20名が論文を寄稿している。以下の文章は、(1) Ebbesen による Pinborg の人物についての回想記、(2) Bursill-Hall による Pinborg の業績についての解説文、(3) 寄稿論文の概観、(4) 書評者のコメントの順に進められる。

(1) Ebbesen の回想記 (pp. 2-5) によれば、Pinborg はデンマークで生まれ、同国で教育を受け、同国出身の中世のスコラ学者の未刊著作の編集と研究のために、その短い人生の約半分を Univ. of Copenhagen で過ごした。彼は大学でいわゆるクラシシスト (a classicist) としての訓練を受けたが、同時に優秀なラテニスト (a Latinist) でもあり、ラテン語の文法や文体に大いなる興味をもった。また、現代の一般言語学、哲学・哲学史、大学制度史などにも関心を寄せた。1962年に学士号を取得し、Danish Society of Language and Literature (DSL) の研究助手、Univ. of